

中学校の鑑賞教育を考える

1. 身の回りの音から教科の授業へ

尚美学園大学教授 石澤 眞紀夫

現代の音環境は、「静寂」を前提としてはいないと思われる。

空調の音、冷蔵庫の音、テレビの音声、外部から無遠慮に入り込むスピーカーの音、電車、自動車の走行音。そして、この頃の若い娘たちが好んで履いているつつ掛けのようなミールとか称するものの甲高い音、駅の階段で上り下りする時の音が特にけたたましい。それで学内から音楽科教育をやる教室までカタカタと入って来られたのでは、文句の一つも言いたくなるというものである。

さらに、人々は公道、車中の区別無しに、あらゆる所で携帯電話によるプライベートなしゃべりの音をまき散らし、その音量は幼児の声のように調節機能が無いかのようである。

しかし、これらの音たちは困ったことに、快適な生活と表裏一体なのである。

＊

このような、音まみれの世界に身を置いて、学校における音楽科の指導は「楽曲の表現・鑑賞」という活動だけで、その存在意義・目標を全うすることができるのであろうかと疑問に思う。

また、音楽科の教員はその活動だけで満足していてよいのであろうか。「音楽」だけでなく、我々を取り巻く環境音を含めて、「音」そのものへの意識・働きかけへの教育の必要性を痛感する。

その意味から、来年度から実施される今回の音楽科学習指導要領改訂の内容に

は、意味のある文言を見い出だすことができる。これを機会に、「環境音」への意識・取り組みに、いっそう踏み込んだ教育現場での活動が期待される。

＊

「環境音」への教育。それは、音楽科の鑑賞を含む諸活動の前提である「静寂」を、まず確保する、意識させるところから入る必要があるのではないかと。

静寂の場にもたらされる「音」（音楽）は、そのことによって意味（価値）のあるものになるのである。したがって、まず、教室にそのような場を確保したい。

その具体的な取り組みの導入例を紹介しよう。

ステップ1 「耳を澄まし、聴取った音を書き出してみよう」（環境音を意識させる）——あまり時間を取ると集中力が弱くなるので1分か1分30秒程度でよい。作業ノートなどに書かせる。

ステップ2 聴取りを記録した「音」の発表・確認——記録した音を発表させる（例：空調の音、鉛筆〔シャープペンシル〕を使う音、飛行機の音、紙が擦れる音、腕が机に擦れる音、椅子のギシギシきしむ音、呼吸音など）。

人によって3件～8件など様々である。共通して多く耳にしたものや、自分だけしか聞き取らなかったものを発表させ、「鋭い耳」を賞揚する。

ステップ3 音環境の現状把握と集計の発表——次の選択肢に答える。(1)身の回りに音があふれている現状に対して、特に感じることはない。(2)音の現状をよいとは思わない～理由も記述。

〔このチェックに対しては大部分が現状容認であった。(2)の答えは、携帯電話の音、話し声の大きさ、夜中のバイクや車の音などがあった。〕

ステップ4 環境音の中から不快・不必要・害だと思われるものを挙げ、発表——(例：携帯電話の音、通話中の声。車やバイクの騒音。大きな話し声、笑い声。ヘッドフォンの音漏れ など。)

ステップ5 「音」や「音楽」から得たいこと、求めたい、期待したいこと——作業ノートなどに記入、集計、発表。(例：心の安らぎ。自分の気持ちが動くこと～感動、元気、集中力、楽しみ、開放。想像力。幅広い人間性。鳥の鳴き声や草が風になびく自然の音は気持ちが癒される。音楽を通して自分自身を磨きたい など。)

このような活動を踏まえてから、音楽科の指導内容の実践に結びつける。

授業に当たって、静寂が確保されたら、そこで発せられる音を大切にしたい。それは、発問、教材の提示、子どもの反応など、音源であるメッセージに注意深く耳を傾け、内容をしっかりとらえ反応する、つまりコミュニケーションすることである。

次に、授業での音への集中度、感度、意識を高めるために、反復聴取の質・精度を上げていくことによって、子どもの「音」および「音楽」への認識力・感性が高められる。

そのような具体的方法は、子どもが音に集中できるように、全員が容易に参加

できる発問（例えば導入段階のアプローチとして、音色から声種・楽器名とその奏法、演奏形態をとらえるように焦点化して指示）をし、音の聴取りの方向を示してポイントが把握できる程度の音楽を提示する。

つまり、発問と音楽は、直結していなければならない。知識・理解事項はここでは必要ない。音楽に対する子どもの聴き取りの結果を仮説として、その検証を展開の段階につなげるのである。

展開では、音楽に対する聴き取り、感じ取りについての子どもの話し合いなどのコミュニケーションや反復聴取とそのまとめ。授業としてのまとめは、子どもの活動を踏まえて、教材である楽曲を十分に耳に入れさせる、といった授業の構成である。

＊

音楽を生み出した気候・風土、人々の文化としての歴史的背景といったことも授業での重要なテーマであるが、まず音・音楽への興味・関心をかき立てる活動がなされてから、子どもからの意識の広がり結びついたものとして、高いレベルの自主的学習の段階として設定するのが効果的ではないかと思われる。

石澤 眞紀夫 東京都公立中学校教員歴30年を経て、北海道教育大学教授として学部と大学院を担当し、定年退官後は尚美学園大学教授として勤務、現在に至る。